波多野完治と発達研究

吉田　章宏

はじめに

課題「波多野完治と発達研究――『児童心性論』をめぐって」の執筆依頼をいただく．早速，『波多野完治全集第６巻：児童心性論』（小学館，1991）を読む．そこに見えて来る「波多野完治と発達研究」の世界を，400字原稿用紙20枚に，言わば「俳句」として語ろう，と考える．私の手元には，『児童心性論』の初版本（賢文館，昭和15年４月13日発行）がある．昭和15年は1940年，まさに「大東亜戦争勃発」（昭和16年12月８日）の前夜．1940年の初版本と1991年の全集本との間には，世界と日本の50年間の歴史が横たわる．第二次世界大戦，太平洋戦争，日本の敗戦，明治憲法と軍国主義の「大日本帝国」から，平和憲法と自由と民主主義の文化国家「日本国」への転生がある．そして今日，21世紀の世界と日本がある．時代を生きた『児童心性論』の語りを，「発達研究」の将来の在り方への「頂門の一針」として傾聴し，暗黙（implicit）のうちに語られ，直ちに明瞭には見えぬかも知れぬ「波多野完治と発達研究」の意味と構造を解明（explication）し，少しでも，よりよく見えるようにすることを，私の課題と受けとめ，努めることとしよう．

波多野完治先生は，私が学部学生だった1959年以来，40年以上もお世話になった大恩人である．波多野先生を呼ぶに「先生」という敬称を省くのは，個人としての私の心情に反する．が，先生は「歴史的存在」，これは「俳句」．で，以下では，原則として敬称を省略する．『児童心性論』は『心性論』と略し，全集版『心性論』のページを［ ］内の数字で表示することにする．

波多野と互いに尊敬しあっていた教育実践者・芦田恵之助（1873～1951）に，「読むとは自己を読むのだ」という有名な言葉がある．『児童心性論』を読む私が，自己を読むことになり，この「俳句」も，自己を詠み，私の貧しい姿を晒す句となる．そう覚悟して，私の世界に映った「波多野の世界」を詠むことで，「共に育ちましょう」（恵之助最晩年の言葉）という呼びかけに代え，読

者を「波多野完治の世界」への参入に，いざないたい．

1．波多野完治：「多様化の統一化」を生きた人

波多野完治，1905年生，2001年没．波多野は，その生涯を通じて，「多様化の統一化」を体現して生きた人であった．『児童心性論』の冒頭に，「子どもの発達は『多様化の統一化』ということをひとつの特徴とする」[9-10] という言葉がある．これを読み，人間・波多野完治自身における「多様化の統一化」を思った．もちろん，波多野は，「多様化の統一化」という言葉を，波多野自身の生涯発達を特徴づける言葉としてではなく，子どもの発達一般を特徴づける言葉として書いたのだったのだが……．

波多野は，子どもが「大きくなる」発達を「多様化の統一化」として特徴づけた後，「どういう理由で」それが起こってくるのかを問う．「現在瞬間に住む」在り方から出発，その後次第に，生活時間と生活空間が拡大する．それに応えるために，それと対応しつつ表裏一体をなす，子ども自身の内なる「分化」と「組織化」が起こる．他者の「生活空間」との交叉と交渉の発生，そこに「親和または対立の関係」が生じる．そして，「人間一人の支配しうる空間はじつに小さなもので，いかに偉大な人といえども一人では何事も成しうるものではない」[12] とした上で，社会的な意味の成長として，「おとなしく」，「おとなになる」ことをとらえる．「大きくなる」において発生する「劣等感」と「自己中心性」，「おとなになる」に，両親による世の中の荒波からの保護により生まれる「実念論」（「両親がいうことだから正しい」[16]）と「両親の絶対視」．「社会の進歩」に伴う「保護」の必要の増大と同時に，「社会化」としての教育の必要が増大する．資本主義社会における「営利の原則」による文化財が発達への障害となり，その対策の必要が発生する．実に明快な論理構造で，そこに大きな展望が出現している．

論の展開を追いながら，私には，子どもの発達にかかわる事柄ばかりでなく，一方で，戦前の体制下での，日本社会とその文化，その国民の後進性への批判，他方で，その体制下で生きる波多野自身の苦悩と隠忍への自戒の思いが，その論の下敷きとして透けて見えてくる思いがした．初版本の『心性論』

の大半を占めたのは，「歪められた児童の生活を修正して，真に幸福な児童生活を確立」するために論じた，綴り方教育を含む「第二篇　児童心性と児童文化」（49-328ページ）だった．改めて，その脈絡で読むと，子どもの「両親の絶対視」は，戦前の「天皇の絶対視」の比喩ともなり，そして，当時の波多野自身が置かれた境涯への苦汁に満ちた思いとも，重なり合う．

さて，波多野が体現していた「多様化の統一化」．

まず，「外の多様化」．波多野は，その生涯を通して，実に多面的で多様な活動をした人であった．私の個人的回想に浮かび上がるその姿を素描してみよう．まず，外国語は，フランス語をはじめ，英語，独語．それに，ギリシャ語とラテン語，伊語と露語を少々．その語学力が，誰にも先駆けて，広く全世界の多方面にわたる最新の研究動向と社会情勢を把握することを可能にしていた．例えば，当時のソビエト・ロシアの研究動向は，『心性論』に現れている英語圏ばかりでなく，独語圏を通しても，通暁していた．

また，その明るく暖かく開放的で磊落（らいらく）な人柄は，人間関係に，驚くべき幅の広さと多様さを生んだ．私があげることができるのは，折に触れての座談で語られた方々の中で，衰えた私の記憶にも残る，ごく一部の方々のお名前にしか過ぎない．まず，戦中，『路傍の石』の山本有三に不遇を慰められた，とうかがった．『善太と三平』の童話の坪田譲二，錦華小学校の同級生だった永井龍男，波多野のオペラへの関心を触発した評論の小林秀雄，などの名前が直ちに浮かぶ．波多野が「児童」とか「子ども」という時，児童心理学のとらえる「子ども」ばかりでなく，一方では，『路傍の石』の吾一や「善太と三平」の姿が思い描かれており，他方では，小学校時代から読書家であった永井龍男や波多野自らの子ども時代の豊かな精神生活が想起されていたに違いない．波多野は，子どもの「弱者」としての立場に深い共感を抱いていた．それは，自らの生母との別れの悲しみに満ちた挿話を描いた文章にもうかがわれる．波多野はジュール・ベルヌの『十五少年漂流記』（新潮文庫）の訳者でもある．自身の子ども時代の微妙で複雑な心の世界の鮮明な記憶をもつ波多野は，目前にいる子どもの心的世界の豊かさを，確信していたに違いない．さらに，その他領域の方々との交流．例えば，比較文学の島田謹二，音楽評論の諸井三郎，その

の映画人．波多野自身，映画評論も書いた．ヘミングウエイを描く米映画『青年』を観に，映画評論家たちの仕事場・東劇最上階の試写室に連れて行っていただいた日を想う．『映画理論史』（みすず書房）の著者アリスタルコとのイタリーでの出会いを喜んでおられた．多くのNHK放送局関係者，視聴覚教育関係者，出版関係者たち．ユネスコ関係者，フルブライト委員会関係者など．フランス文化関係者．綴り方教育の実践者たち．芦田恵之助，芦田の高弟・大村はま．斎藤喜博，林竹二との鼎談．『美術と視覚』や『視覚的思考』（美術出版社）の著者・アルンハイム（Arnheim, R.）との長年にわたる親交．言語学者・チョムスキー（Chomsky, N.）との対談．私も陪席したオースベル（Ausubel, D. P.）との対談が想起される．多くの外国からの来訪者に実に暖かく丁寧な応対をなされた．そして，専門領域の心理学界における「親和または対立の関係」の多彩さは，言うに及ぶまい．さらに，波多野の周囲には，若い研究者たちがいつも集っていた．

実は，以上のような多彩な人間関係は，波多野の関心学問領域の多様化，と表裏一体を成している．ジャネ（Janet, P.）の言葉「心理学者はなんでも屋」を，身をもって生きたのが波多野であった．それは，『心性論』一冊にも十分にうかがわれる．波多野の研究関心はそもそも「心理学」に狭く限定されていなかった．ある時，「心理学は自分が好む学問の一つである」との，「心理学」からの距離を感じさせるお言葉をうかがい，若い私は，「はて，完治先生は，心底からの心理学者ではなかったのか」と，意外な思いをした記憶がある．経済学部に学び，以後も続くマルクス経済学研究の素養は，『心性論』の論理構造の骨格を成し，教育心理学と一般心理学の関係を，「貨幣論にたいする経済学原論」という比喩［106］となって，ちらと姿を見せている．言語学，文学は言うに及ばず．哲学も，唯物論から観念論まで，広く通暁しておられた．弁証法的唯物論の造詣は，いうまでもない．敗戦を迎えた日，独原著で『資本論』を読み耽っていたと，うかがった．その一方で，若いとき，山下俊郎，牛島義友らと共に，ブレンターノ（Brentano, F.）の『経験的立場からの心理学』を独原著で読んだ，ともうかがった．「指向性」に言及し，「意識の指向性」を「行動の指向性」の発展したものと捉える思想［42］は，メルロ＝ポンティ（Merleau-Ponty, M.）の『行動の構造』の思想にも通じる．初版本には，当時の厳しい社会情勢の下，哲学的背景への直接的言及を避けるための，たいへんな苦労が秘められている．例えば，「物心一如の立場」［29］という苦心の表現，「いまやわれわれは近代ヨーロッパの考え方から脱却して，東洋流の考え方，もっと素朴な，人間の精神に固有な，物心一如の考え方から出発しなおさなければならない」［37］との表現には，「国家総動員法」（1938年）の言論統制下，今日では想像もつかぬご苦労の一端が偲ばれる．

戦後も，波多野は，「ある人」［56］とか「ある哲学者」［179, 213］などの慎重な表現を保持している．しかし，ピアジェ（Piaget, J.）の「児童における実在の構成」の実験事実の紹介に先立って，ピアジェの研究を「材料にして」と書き，詳細な紹介の後で，「いまのところ，われわれはこの事実を利用しつつ，いかにしてわれわれの理論――反映説を強化しうるかを考えればよいのである」［200］と述べている．単なる紹介ではないのだ．ことに，「素朴実在論の発展」［215-216］を説いて，ジャネの言う「反省的信念」としての「模写説」（実在論）に「永久に到達しない人」たちについて言及していることは，注目に値しよう．ここには，波多野が，単なる「多様化」を超えて指向していた「統一化」が暗示されている．戦後版の冒頭に，「どんな本にも『立場』がある」［47］と書き，それを，苦心の末，「社会的機能主義」と名づけたのも，また，この「統一化」の指向の強烈さを表している，と感じさせられる．波多野は，「教育哲学をもたずには教育心理学者にはなれない」［108］ときっぱり断言する．教育に「必然の認識としての理想」［85］を必須と説き，実現すべき価値として，「ヒューマニズムの徹底」［85］と「教育によって社会そのものをよりよくしていく」［87］を掲げ，その実現に「教師たちの団結」［89］を呼びかけていたのである．心理学者たちは，一般に，社会問題への関心不足と哲学的素養の不足から，こうした自覚が足りず，アカデミズムに閉じこもり，外国直輸入の心理学を借りてきては，「ごった煮」心理学を書く場合が多い．波多野は，たんなる「科学」としての教育研究と教育心理研究を真っ向から高唱していた［83］．この点の深い自覚で，波多野は希有で卓越した存在であった．波多野の活躍領域を，その高弟・寺内礼は，文章心理学，ピアジェ研究，児童

観，児童心理学と児童文化論，コミュニケーション，視聴覚教育，生涯教育論の五領域に分類している［380］．その多彩さは多言を要しない．その理由を，人々と一緒に仕事をするのが好きで，求められ，必要とされるところで仕事をしていたら，自然にこうなったのさ，と笑って自らを語られたことがあった．人々との交流を楽しみ，晩年の俳句修行に見られるように，生涯教育論を自ら実践し，生涯を通して学び続ける人であった（波多野，1993）．

つぎに，波多野の「内の多様化」．その内なる世界の豊かさは，膨大な読書の量とその洗練された質に見られる．神奈川県二宮の書庫の膨大な蔵書．人間交流関係の豊かさには，内的な世界の豊かさが対応する．心理学のピアジェとワロン（Wallon, H.），ジャネ，ポリツェル（Politzer, G.），ルビンシュティン（Rubinstein, S. L.），ジェームズ（James, W.），への言及が，私の印象に残る．ルビンシュティン（1982-86）翻訳出版は，波多野の導きによる．

さて，では，波多野の「多様化の統一化」は何故か．その理由の一部は，波多野が，時代と社会の実践から離れず，多彩な他者との豊かな人間関係を生きたこと，つまり，時間的にも空間的にも，広く多様な社会と実践的にかかわったことで，理解されるかもしれない．波多野の説く「子どもの発達」論に従って，波多野自身の生涯発達をとらえるならば，そう理解されよう．波多野の発達研究と教育心理学研究への動機づけには，社会的弱者としての子どもへの共感があった．そして，子どもが，弱者を大切にする社会を築くようになることを願う，幸せな社会の在り方への希求があった．さらに，「よりよい社会の建設」［88］への理想があった．「アカデミーの住人」［110］「心理学屋」［108］の，教育実践と社会実践への無関心に対する厳しい批判．実践のための「科学」［113］としての教育心理学への期待が，伝わってくる．

完治先生は，「完治ではなくて，未完治だよ」，「僕は『だら幹』だからね」などと，自らをよく笑われた．決して冷ややかな自嘲ではなく，一人の人間としての自己を客観視し，愉快がっての明るい哄笑であった．ソクラテスの笑いを，私は思った．その完治先生が，悲しみに堪えかねて，身体の震えを抑えることに懸命に努める様子を示されたことがあった．勤子夫人の逝去に，その深い悲しみを，来訪した米国人オースベル博士に，切々と訴えられた時だった．

先生の人間的暖かさ，夫人への愛情の深さに，胸うたれた．

2．「と」

課題「波多野完治と発達研究」を，単に「波多野完治」と「発達研究」を並列したものと，初め軽く読み過ごしていた．が，改めて考え直すべきことに，気づいた．無関係なものを「と」で並置しているのではないからだ．

「と」は，「波多野完治と発達研究」という表現の場合，格助詞であろう．この格助詞は，ある国語辞典によれば，「ある事柄について共存するものを示すのに使う」とある．浮かび上がってくる端的な問題は，この「と」は，何と何を共存するものとして示しているのか，という問いだ．“and” の「と」か，“with” の「と」か，と問うてもよい．「波多野完治『と』発達研究『と』の両者を並べて，眺めてみると，互いに，どのような関係にある，といえるだろうか」と問う時の「と」（and）であろうか．それとも，「私『と』波多野『と』が共に，社会における人間の発達を研究する」とすれば，私はどう在るべきだろうか，また，何をどう為すべきだろうか，と問う時の「と」，つまり，「と共に」（with）を含意する「と」であろうか．前者においては，「発達研究」は，すでに完了し死んだ静的な客体的対象を表す名詞として，現れる．後者においては，今も生きている動的で能動的な主体的活動を表す動詞として，われわれ一人ひとりに迫ってくる．そもそも「波多野完治」は，「発達研究」と並べて，遠くから眺めるべき対象になってしまったのだろうか．あるいは，われわれ一人ひとりが共感しつつ，それぞれの心の中に生き続ける実存（existence）であるのだろうか．『心性論』に表現された波多野完治の心を，われわれの心に再活性化（『幾何学の起源』のフッサールの言葉）し，「発達研究する」道へと呼びかけ誘われているとも，感ぜられる．「波多野『と』発達研究『と』を眺める」ことを超えて，「波多野『と』共に，人間の発達を研究する」とき，「波多野完治と発達研究」は『児童心性論』を通じて，波多野の望んだように，未来の児童と人間の社会のために生かされうる，実践的で科学的な人間研究となるのではないか．

3．発達研究

では，波多野にとって，「発達」とは，「児童」とは，何だったか．「児童」はもちろん「子ども」であろう．しかし，教育を思い，教育によって「おとな」になり，明日の社会を担う人間である「児童」を，波多野は，単に現在ある姿の「子ども」としてのみは，見ていなかった．よりよい教育を通して，明日の「よりよい社会の建設」に参加する人間へと「発達」していく人間として，将来，われわれの仲間となる人々として「児童」を見ていた．そのための「よりよい教育」と「科学」の建設にこそ，今日では「大人」となったかつての「子ども」であるわれわれの責任がある，それが，波多野の心であり，精神であった．そう，私は思う．ふと，教育実践者・斎藤喜博の短歌「未来そのものが今目の前にゐるのだとこの子らをみていふ人のあり」を想起する．そのような波多野は，その「発達研究」において，「没価値的科学的児童観」[126]を否定し，単なる研究のための研究を，断固として退けていた．発達研究も児童研究も，よりよい教育のための実践的研究として考え「人間の変革を志す教育のための科学である」[129]と，極めて明確に性格づけていた．

4．『児童心性論』(1991年・全集版)

五七五の「俳句」には，『児童心性論』の要約や紹介は不可能であり，また，ふさわしくもない．私にできることは，読者自らがお読みになることへ，お誘いすることのみである．1991年，『波多野完治全集』全12巻が，波多野と縁の深い小学館から，刊行された．この全集の刊行は，波多野の深い喜びであった．とともに，それは，波多野の生涯にわたる研究の全容を世に告げ知らせ，その豊かな世界への私たちの参入を可能にする贈り物であった．

『心性論』の原稿は，専門の編集者が言う「白い」原稿である．漢字が少なく，柔らかく読みやすい文章なのである．だが，その内容は，極めて濃密で充実している．そのような文章を書く波多野は，読者に，大事なことを，わかりやすく，おもしろく説くことを，常に実現していた．それは，波多野の理想と研究が，広く読まれ，教育実践に現実に生かされることによって，子どもたちに幸せがもたらされ，弱者たる子どもが健やかに育ち，ひいては，明日の「よりよい社会の建設」に参加し，そのような社会が実現されることへの強い願いからであった．時間的射程の長さと空間的視野の広さこそがもたらした「白さ」だったのである．「白く」なければ，広くは読まれないことを，苦労人の波多野は骨身にしみて知っていた．しかし『心性論』は，「白く」書かれた読みやすい本ではあっても，底の浅い内容の貧しい本では決してない．例えば，「児童心性」なる語は，「児童を総合的，具体的にとらえようとする概念」[382]と「解説」されている．書名のこの一語は，当時広く見られた，児童を「バラバラにとらえる」児童研究・発達研究に対する，厳しく鋭い根本的批判を表現した語ともなっていたのである．

おわりに

波多野完治先生ご自身の生涯発達における「多様化の統一化」を思うとき，「波多野完治と（共に）発達研究（を実現する）」のは，容易にできることではない．物事を，巨視的にも微視的にも，多面的にも統一的にも把握する知力と想像力，「営利の原則」が支配する通俗社会の中で，ヒューマニズムの理想を目指し続ける心情と強い意志，「児童」に共感しつつ，児童を通して人間の発達を理解する豊かな教養，を必要とする．「反省」を必要としない「心理学者」は稀であろう．『児童心理学の進歩』の読者に，『児童心性論』の精読を通じて「波多野完治と発達研究」の世界に参入し「共に育ちましょう」と呼びかけたい，と願う．私は，改めて，長年の学恩を思った．

文　献

波多野完治　1993　吾れ老ゆ故に吾れ在り――老いと性の人生と．小学館．
ルビンシュティン, S. L.　1945　秋元春朝・秋山道彦・足立自朗・天野　清・佐藤芳男・松野　豊・吉田章宏（訳）　1982-1986　一般心理学の基礎（全4巻）．明治図書．

児童心理学の進歩2002年版 抜刷

波多野完治先生追悼

波多野完治と発達研究――『児童心性論』をめぐって

金 子 書 房